



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	指示詞の発話機能 : ポライトネスの観点から
Author(s)	李, 京和
Citation	研究論集, 12, 221(左)-233(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51969
Type	departmental bulletin paper
File Information	012_LEE.pdf



指示詞の発話機能

—— ポライトネスの観点から ——

李 京 和 (イキョンファ)

要 旨

本稿では、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」が実際の会話でどのような効果を生み出すかについて考察を行った。結論として、指示詞には社会的発話機能もあり、その一つとして、ポライトネスを強化する機能があると考えられる。これまでは、単に3つの指示詞がどのような原則で使われるかが主に研究されてきており、実際の会話場面における指示詞の効果についてはさほど分析されてこなかった。しかし、言語使用は特定の場面の中で行われるものであり、同じ言葉を使っても話し手が伝達したいことはその発話状況によって異なってくる。したがって、指示詞の使い方において同じ「コ・ソ・ア」でも伝えたい意味までは同じでないという観点から、本研究を分析を行った。ポライトネスには、聞き手との共有を求める「ポジティブ・ポライトネス」と聞き手から間接性を置く「ネガティブ・ポライトネス」がある。そして、指示詞「コ・ソ・ア」も基本的に直接性や間接性などを表す機能を持っている。この二つを結びつけ実際の会話から考察したのが、本研究の内容である。

1. はじめに

本稿では、日本語の指示詞「コ系」、「ソ系」、「ア系」の発話機能について考察する。従来の研究は、主にこの3つの指示詞を用いる際に基となる規則あるいは原理の追求に集中してきたといえる。しかし、指示詞は、実際に使われる場面の中で考察すると、様々な発話機能があり、その中でポライトネスを強化する機能があると考えられる。

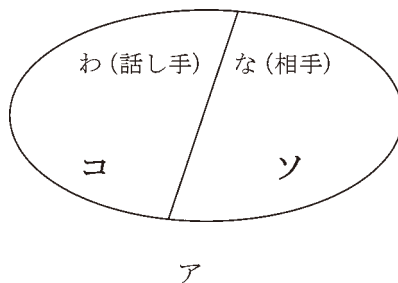
2. 日本語の指示詞に関する先行研究

日本語の指示詞に関する研究は、数え切れないほど多く、近代から活発に議論されてきた。

指示詞の機能としては、現場性を持つ指示対象を指すことと、現場性のない指示対象を指すこととで、大きく分けられる。これは、以下のような用語で多く知られている。

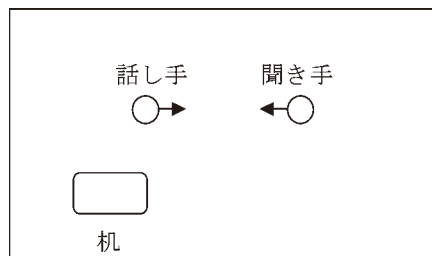
直示(コ・ソ・ア)	照応(コ・ソ)	想起(ア)
現場性あり	現場性なし	

最初の日本語の指示詞は、直示のほうが主に議論されてきたと言える。そして、距離という概念を基準として、話し手から近いものを「コ」、話し手から中距離のものを「ソ」、話し手から遠いものを「ア」と表すとしてきた。しかし、佐久間鼎(1936)は、これに反して、「領域説」を提唱した。「領域説」とは、話し手と聞き手のなわばりを基準とする理論で、話者たちが対立する場合、自然に以下のようななわばりが形成されるわけで、指示対象が話し手の領域であれば「コ」を、聞き手の領域であれば「ソ」を、両方の領域外であれば「ア」を用いると主張した。



佐久間 (1936)

佐久間の理論は、従来の指示詞の概念に新たな観点を与えた点として、大きい業績であるといえる。しかし、これに対してもまた様々な議論が行われるようになり、例えば、高橋(1956)では、以下の図のように話し手と聞き手が対立をなしていても、話し手が自分の後ろにやや離れている机を「それ」と指すとし、対立が必ずしも「領域説」に繋がるわけではないことを明示した。



高橋 (1956)

このように、直示の指示詞は、「距離説」と「領域説」が、融合して使われるか、発話状況によって切り替えるかという二つの意見に大きく分けられてきた。

しかし、加藤（2004）では、これらが「アクセス」という概念によって、一つにまとめられた。((1)は、筆者による要約である)

(1) 直示

コ系	直接アクセス	距離説では話し手から近い、領域説では話し手のなわばりであることから、話し手が指示対象に対して、特にアクセスのための負担がなく、直接アクセス可能であると見込まれる。
ソ系	間接アクセス	距離説では話し手からやや離れている、領域説では聞き手のなわばりであることから、話し手が指示対象に間接的・二次的にアクセス可能であると見込まれる。
ア系	遠隔アクセス	距離説では話し手から遠い、領域説では話し手と聞き手のなわばり以外であることから、単一の負担ではアクセスが可能であると必ずしも見込まれない。

ここまでは、直示に関する理論であるが、指示詞には、すでに述べたように、現場性のない指示対象を指す機能もある。これは、二つに分けられる。((2)は筆者による要約である。)

(2) 照応と想起

照応	コ系	直接性	発話の中で出てきた指示対象を、談話記憶に一時的に入れておいて、そこから情報を引き出して指示すること。
	ソ系	間接性	
想起	ア系		「照応」のように発話の際に出てきたのではなく、話し手の頭の中に「長期記憶」として存在している対象を指すこと。

加藤（2004）では、「コ系」は直接性を、「ソ系」は間接性を持っているとし、これは直示の用法の「直接アクセス」と「間接アクセス」と繋がっていることを示している。

以上、指示詞の先行研究を簡単に見てきたが、日本語の指示詞については基本的に加藤(2004)の理論を参考にすることにする。

3. 指示詞の選択に関する先行研究

今までの日本語の指示詞に関する先行研究は多く、さまざまな成果がなされてきたが、そのほとんどが三つの指示詞のうち、言語規則として確実に一つしか使えない際の原理を突き止めることに関心が持たれてきたのではないかと思う。しかし、必ずしも一つの発話状況に一つの言葉しか使えないわけではない。選択肢があり、どちらかを選んで使う場合も多い。それは指

示詞も同じである。本稿では、このような考え方から、指示詞のうち二つ以上の選択肢が現れる場合、各指示詞がどのような機能を持つのかについて考察を行ってみたいと思う。

ある発話状況で選べる指示詞が二つ以上ある場合に関する先行研究は、実際にはあまりないが、このようなアプローチは、堀口（1978）で行われたことがある。堀口は直示の領域説を例に挙げ、同一対象を一方がコで指示すれば、他方はソとするのが普通であるが、対象に対して自分に関わり強いとする場合に他方がコで指しても自分もコを使え、他方がソで指しても自分に関わり弱いとする場合には同じくソを使えと説明し、それはまったく対象に対する話し手の関わり方の気持ちしだいであると主張した。

(3) 堀口の例 1

A 「コノ絵ハピカソダネ」

B 「ウン、コレハピカソダヨ」

A 「ソノ絵ハピカソダネ」

B 「ウン、ソレハピカソダヨ」

しかし上の例は、まず二人の話者と絵の間の状況について明示されていないため、根拠としては不十分であると思われる。また、どの指示詞を選ぶかが、話し手の気持ちしだいであるという説明は論理的ではない。

堀口は照応と想起に関しても、例を挙げている¹。

(4) 堀口の例 2

新橋駅から有楽町の四辻に向かう、かつての土橋通り、あの通りにはずいぶん画廊が並ぶようになった。それで、あすこを通る時には自然と目が飾り窓にゆき、そこに陳列された絵をみることになる。

堀口は、この例文において、「あの通り」「あすこ」は、話し手が「あの通り」の前に述べた「かつての土橋通り」を、自分に関わり強い遙かな存在と捉え、強烈に指示したものであるとしている。もしも、自己抑制した表現が適当と考えていたら「ソノ通り」「ソコ」と平静に指示し

¹ 堀口（1978）では、照応と想起を機能上の区分はしているが「文脈指示」として同範疇に入れている。

たであろうし、自分に関わり強い身近な存在と捉えていたら「コノ通り」「ココ」と指示したであろうと説明している。そして、コ、ソ、アのうちどちらを使うかは、話し手の気持ちにまかされており、そのどちらを多く用いるかは、話し手のくせであるとしている。

堀口の主張は多少極端に思われるかもしれないが、実際多くの指示詞に関する先行研究を見ると、選択肢がある場合「どちらも使える」か「感覚」という面を主張して終わるのがほとんどである。しかし、指示詞はこのような理由だけで使われているのだろうか。

4. 指示詞の再考察

発話状況において、指示詞の選択が出現する場面がある。話し手が聞き手に何かを話すということは、伝達したいことがあるからで、その目的のために「意図」がはたらくと思う。従って「どちらかを選ぶ」ということは、話し手の意図が関与するともいえよう。次の例をみられたい。

(6)

(仲間同士である A, B, C, D が集まって飲み会をやっている。みんなが C の恋愛話について話している。)

A：プロポーズされたの？

C：そう。

D：えー、どうやって？

C：彼氏に、この前浮気したこととか、元カノと一緒にいたこととか言って、全部知ってるよと言ったら、土下座して、結婚してほしいって。

B：えー、ちょっと。

A：やばいよー。D ちゃん的にはどう思う？

D：いやあ、ちょっとね…C ちゃん、{これ／それ}はおかしいよ。いくら長い付き合いだったとしても、{この／その}話はちょっと違うかな。

ここで、D は C の恋愛話を「コ系」と「ソ系」で使い分けている。C の恋愛話はあくまでも C のものであり、「ソ系」で表すのが無標である。しかし、D はそれを最初は「これ」と「コ系」を使っている。これは、単純にその恋愛話を目の前にあるように鮮明に述べるためだけではない。「コ系」を使って自分の方に直接性をもたらすことで、自分は C のことを仲間として心配していることを示したのである。そのあと、同じ恋愛話を「その」と「ソ系」を使ったが、それは、その話が「おかしい」ということを繰り返して言おうとしたとき、また「コ系」を使うと C の恋愛話を取り立て過ぎて、C が間違っているような印象を与える可能性があるので、強い

言い方になるのを避けるために、間接性を持つ「ソ系」を選ぶほうがいいという意図がはたらいたのではないと思われる。

(6)の例のように、指示詞の使い分けの際、直接性や間接性が作用するだけではなく、相手との関係も考慮するといえるのではないだろうか。これは、要約すると以下のようになる。

- ①話し手が指示対象をどういう風に捉えるのか。
- ②話し手は聞き手にどういう解釈をするように望むのか。

つまり、話し手が指示対象を指す際、それに対する「目的のための意図」がはたらし、それは聞き手への「ポライトネス」の観点から捉えることもできるだろう。

4.1. 「ポライトネス」の定義

ここでは、「ポライトネス」について簡略に述べる。

Brown & Levinson が提唱した「ポライトネス」を見てみると、まず人間には「フェイス (face)」という基本的な欲求があり、これには二種類がある。

- ポジティブ・フェイス：他者に受け入れられたい・よく思われたい欲求
- ネガティブ・フェイス：他者に自由な行動や興味を妨げられたり邪魔されたくない欲求

そして、言語行為 (speech act) には、必然的に聞き手や話し手自身のフェイスを侵害してしまうものがあり、Brown & Levinson はこれを「フェイス侵害行為 (face threatening act [FTA])」と呼んだ。この FTA に対する補償的行為が「ポライトネス」である。2つのフェイスは話し手と聞き手の両方が持つものであるため、ポライトネスもそれに従って4通りになるが、本稿では、聞き手に対するポライトネスを中心に考察を行う。

(7) ポライトネスの定義

ポジティブ・ポライトネス	“他者に受け入れられたい・よく思われたい” という聞き手の欲求に向けられる補償的行為のストラテジー 例) ほめる, 一致, 共感を見いだす など
ネガティブ・ポライトネス	“他者に自由な行動や興味を妨げられたり邪魔されたくない” という聞き手の欲求に向けられる補償的行為のストラテジー 例) 遠隔化的表現, 間接的表現 など

4.2. 「ストラテジー」の定義

ここで、目的のための意図を遂行する戦略のことを、Brown & Levinson が提唱した用語を借りて「ストラテジー」と呼ぶことにする。このような言い方は、伝達のために頭の中で時間をかけて計算し、考え込んだ結果のことを指しているように聞こえるかもしれないが、それだけではなく「慣習的・無意識的な言葉の使い分けなどもカバーする広い概念である。」（滝浦 2008：32，下線は筆者）

4.3. 「指示詞とポライトネス」に関する先行研究

このような捉え方が、滝浦（2008）ではすでに「指示詞とポライトネス」という観点から言及されたことがある。

(8) 滝浦（2008）の指示詞の捉え方

〈現場指示（直示）〉

コ系	自分の領域	自分を含む
ソ系	相手の領域	自分を含まない
ア系	われわれの領域	自分を含む



〈文脈指示（照応・想起）〉

コ系	直接的な経験	
ソ系	間接的な経験	客観的な捉え方
ア系	共有の（もしくは擬似的な共感の）経験	



〈指示詞のまとめ〉

コ系・ア系	事柄を近接的に捉える
ソ系	事柄を遠隔的に捉える

しかし、文脈指示のア系の場合、必ずしも話者間の「共有」が前提である必要はない。上述した(2)の想起の機能のように、話し手にとって長期記憶であれば成立するのである。たとえば、以下のような会話は容易に行われる。

(9)

A：昔のタレントとか知ってる？

B：昔，テレビで観たのが…はぐれ刑事純情派。

A：主役は誰や？

B：藤田まこと。

A：そうや，そうや。(Cに向かって) はぐれデカ知ってるか？ はぐれデカ。

C：知らないです。観たことないです。

B：はぐれ刑事純情派，知らん？

C：知らないです。

B：あの人間味あふれる，ね!?

C：知らないです。

また，滝浦（2008）では，現場指示（直示）のア系を（コ・ソの領域を除いた）われわれの共有空間に属するとして「近接的」に捉えられている。しかし，直接目に見えるものを指すこととしては，「コ・ソ・ア」のいずれも，「明確に空間的にわれわれが共有しているもの」がそもそもの前提であり，その中で，「コ・ソ・ア」を使って区分するので，やはり「ア系」はその中で最も遠隔性を持っていると見るのが正しいであろう。そして，「指示詞とポライトネス」に関する分析とはいえ，指示詞がもたらす「直接性・間接性」の移動のみ言及されさほど深く掘り下げられず，指示詞を用いて最終的に伝達しようとする状況にまでは発展していない。

4.4. 「指示詞とポライトネス」の考察

このような観点から，以下では指示詞を用いたポライトネスの表し方をより詳しく考察してみたいと思う。

①コ系

〈直示・照応〉

(11)=(6')

(仲間同士である A, B, C, D が集まって飲み会をやっている。みんなが C の恋愛話について話している。)

A：プロポーズされたの？

C：そう。

D：えー，どうやって？

C：彼氏に，この前浮気したこととか，元カノと一緒にいたこととか言って，全部知ってるよと言ったら，土下座して，結婚してほしいって。

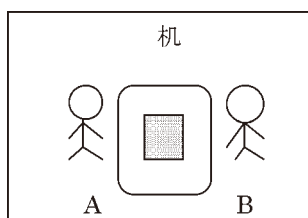
B：えー，ちょっと。

A：やばいよー。D ちゃん的にはどう思う？

D：いやあ、ちょっとね…Cちゃん、{これ／それ}はおかしいよ。(中略)

4. で見たように、DはCの恋愛話を「コ系」で指しており、Cの話を自分のほうにも近づけることで、共通基盤を形成し共感を表している。これは“他者に受け入れられたい・よく思われたい”という聞き手の欲求に向けられる補償的行為のストラテジーである。そのためDの「これ」は「ポジティブ・ポライトネス」の特徴を含んでいる。最終的にDがCのことを「仲間として心配している」ことを伝えたいという意図が果たされたといえる。

(12)



(営業部の社員 A と B が、〇〇社との契約の問題について会議をしている。いい方案が思い浮かばず悩んでいるところを、上司が会議室を訪れて、今度は××社との契約の問題に関する書類を机に置き、一緒に解決するように頼んで会議室を出る。)

A：××社とも問題があったとはね。

B：そうですね。

A：やることいっぱいって感じだな。

B：ま、私のほうで{この／その}問題进行处理させていただきますので、A さんには〇〇社のことだけに集中していただければと思います。

BはAに負担をかけないことを表すため、敬意を示す・相手に借りを負わせないことを明言するなどといった、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーを用いて発話をしている。そして、上司が持ってきた書類は、二人の間に今入りこんできたものであり、Bが問題の書類を「その問題」のように「ソ系」で指すと、それは今現れた指示対象として中立的に捉えることになる。しかし、それを「この問題」と自分のほうに近づけることで、Aからその問題に対する間接性を置いたとみなせる。これは、“他者に自由度を妨げられたくない”という聞き手の欲求に向けられるストラテジーの一種で、「ネガティブ・ポライトネス」の特徴を含んでいるといえる。したがって「この問題」と表現することで、Aに負担をかけないという意図をより効果的に伝えたと捉えることができる。

②ソ系

〈直示・照応〉

(13)

(友達である A と B が長い時間をかけて歩いている。)

A：あー、疲れた…もう足がやばいよ。

B：そうだね。相当歩いてるもんね。

A：いつまで歩かなきゃいけないの。

(前にあるやや離れた角の方に、少しは遠いと感じられる距離から橋が見えてくる)

B：ほら、{その／あの} 橋を渡れば、もうすぐだよ。

ここで A は「その」を用いて、見えてきた橋がさほど遠くないと捉え、自分たちに指示対象をより近づけている。これは「橋が遠くないからがんばろう」という意味で、指示対象に対して楽観視することで、友だちである B を励ましたといえる。したがって B の最後の発話は「ポジティブ・ポライトネス」として使われ、そのときの「その橋」は、共有度を上げることから、ポジティブ・ポライトネスの効果をより強化したと捉えることができる。

(14) = (6'')

(仲間同士である A, B, C, D が集まって飲み会をやっている。みんなが C の恋愛話について話している。)

A：プロポーズされたの？

C：そう。

D：えー、どうやって？

C：彼氏に、この前浮気したこととか、元カノと一緒にいたこととか言って、全部知ってるよと言ったら、土下座して、結婚してほしいって。

B：えー、ちょっと。

A：やばいよー。D ちゃん的にはどう思う？

D：いやあ、ちょっとね…C ちゃん、これはおかしいよ。いくら長い付き合いだったとしても、{この／その} 話はちょっと違うかな。

D は最後の発話で、その恋愛話に対して「ちょっと違うかな」と曖昧化することで、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーを用いている。そして、最初「コ系」で指した C の恋愛話を「その話」と「ソ系」で指すことで、指示対象を C に戻している。これは、C の恋愛話から遠ざかることで間接的表現をより強く表し、一種のネガティブ・ポライトネスの特徴を持っていると考えることができる。これによって、D はその話が「おかしい」ことを繰り返していおうと

したが、また「コ系」を使うと C の恋愛話を取り立てすぎて、C が間違っているような強い印象を与える可能性があるため、それを避けるために間接性を持つ「ソ系」を選んだと捉えられる。

③ア系

〈直示〉

指示詞の選択が出現する場合のア系は、三つのうち最も間接度の高い遠隔性を表すため、「ポジティブ・ポライトネス」のストラテジーには適用されない。以下に、ネガティブ・ポライトネスを表す例を見てみよう。

(15)

(A と B が事務室の中にいる。ある重要な書類を外に見える会社まで届けなければならない状況にいる。会社は事務室の窓から向こう側にすぐ見える距離にある。)

A：私が持っていきましようか。

B：いやあ…{あそこ／そこ}まで持っていっていただくのは、本当に申し訳ないことですので…

B は、A の提案を断るにあたって、窓からすぐ見える会社を「ア系」を用いてより遠いと捉え、指示対象から遠隔性を置いたとみなせる。そして、遠いところまで行ってもらうのは申し訳ないことをより強調して示したと考えられる。そのときの「あそこ」は遠隔性を表すため、ネガティブ・ポライトネスの特徴を含んでいると捉えることができる。

〈想起〉

共有あり→共有が前提になっている場合、「ア」を用いるのが無標なので、ここでは扱わない。

共有無し→以下で論じる。

(16)

「海で泳いでたら沖に流されちゃってね、{あの／その／この} ときばかりはもうダメかと思ったよ」(滝浦 2008, 下線は筆者)

滝浦は、この例で話し手は「あの」を使って沖に流されてしまったことを疑似的に共有することを表し、聞き手と事柄を共感したいという「ポジティブ・ポライトネス」が果たされたと

述べている。

ただ、例(16)では、指示対象（沖に流され溺れたこと）に対する共有形成の可能性についての説明はない。しかし、この例では、溺れることは、だれでも一度は経験するか、共有できると思う経験であり、話し手と聞き手が親しい友達で共有の場が形成されやすい間柄であることが想定されているとみなしていいだろう。

(17)

(Bに大変な事件が起きたと聞いたAがBのところを訪ねて)

A：大変なことがあったと聞きました。私はよくわかりませんが、もし力になれるのなら手伝います。

B：いや…ありがたいですが、{あの／その／この}件は、ずいぶん複雑になってきていますので、ちょっと無理ですかね…

この会話でBは、Aの協力をネガティブ・ポライトネスのストラテジーを使って断っている。同時に、「あの」を用いて指示対象（大変な事件）が自分のほうに深くかかわりがあることを示している。自分の長期記憶であることを意味し、Aから指示対象に対して間接性を置くことは、ネガティブ・ポライトネスの特徴であるとみなせ、より効果的な断りの表現を作ったと捉えることができる。

ここで、「この件」といってもAが導入した「大変なこと」をBが自分のほうに近づけることで、Aとは関わりがないことを示し、協力を断ることを伝えられる。ただ、「あの件」と「この件」の分析は区別して行うべきである。「この件」は照応として、あなたが今話に導入した大変なことに対する表現で、「あの件」は想起として前から私に深くかかわっていることを意味する表現になる。

5. まとめ

本稿では、従来の研究で指示詞の対人向けの発話機能については、さほど言及されていなかったことに着目した。そして、実際に指示詞が対人関係において、どのような効果を生み出すか、例を挙げ分析を行ってみた。各指示詞「コ・ソ・ア」には、どちらを選択するかの対立が生じる場合、発話状況によって「ポジティブ・ポライトネス」もしくは「ネガティブ・ポライトネス」をより強化する機能があると考えることができる。そして、最終的にはポライトネスを通して、聞き手に伝達したい意図をより効果的に表すのに用いられることから、指示詞には直接性・間接性を表すのみならず、社会的発話機能もあるといえるだろう。

(い きょんふぁ・言語文学専攻)

参考文献

- 加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社
- 佐久間鼎（1936）『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- 高橋太郎（1956）「『場面』と『場』」『国語国文』25-9（京都大学文学部国語国文学研究室）
- 滝浦真人（2008）『ボライトネス入門』研究社
- 堀口和吉（1978）「指示詞と表現性」『日本語・日本文化 8』大阪外国語大学
- ペネロピ・ブラウン，スティーヴン・C・レヴィンソン（著），田中典子外（訳）（2011）
『ボライトネス 言語使用における，ある普遍現象』研究社